

野外活動センタースタッフの
リスクマネジメントの考え方について
青木 亮澄 (生涯スポーツ学科 野外スポーツコース)
指導教員 中野 友博

キーワード：野外教育, 直接体験, リスクマネジメント

1. 緒言

野外教育とは、野外活動や自然体験活動をはじめとした、さまざまな体験活動を通して行う教育とされている。言い換えれば、直接的な体験を通して行われる教育と捉えられる(甲斐, 2011)。

「リスクとは何か」という問いに対して、石井(2002)は「事故発生の可能性および経営活動の結果の不確実性」, Nick(2000)は「ある一定の時間の中で、具体的な不利益な出来事が起こる確率」と定義している。辞書をみれば、「危険」そのものを指す概念もその定義の中には混在している(甲斐, 2011)。つまり、「リスク」という言葉の認識はその人によって違ってくると考えられる。

そこで本研究では、野外活動施設のスタッフとボランティア・リーダーのリスクマネジメントの考え方について明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

[調査の対象者]

滋賀県希望ヶ丘文化公園の野外活動センターのスタッフ5名と大学1回生から4回生のボランティア・リーダーの29名である。

[調査手続き]

中西(2007)が作成した質問紙調査の手順を参考に、自らが作成したアンケート用紙を用いた。スタッフはチェック式4項目、記号2項目、記述4項目の10項目でボランティア・リーダーは順に2項目、3項目、6項目の11項目であった。

[調査時期]

2014年11月30日で来年に向けてのプログラムに取り組んでいる時期。

3. 結果・考察

1) 心掛けていること

スタッフは指導者自身の過信が無いことや経験値を最も重要視し、次に対象者の経験を重要視していることが明らかとなった。アンケート用紙の自由記述の結果から、ボランティア・リーダーはプログラム指導の際、活動中の危険の把握や怪我の対処を心掛けていることが読み取

れる。

2) 考え方の類似点と相違点について

同じような考え方であっても、「スタッフ」は数々の経験や体験を通して、身の危険を感じているからこそ、「リスク」を非常に注意深く捉えている。したがって、同じ「危険予知」でも確認する場所や方法が異なると考えられる。経歴の浅いボランティア・リーダー程、「リスク」=危険と捉え目に見えない危険を探しがちである。また、自然体験活動指導者に必要な資格を持っているスタッフは経験が多く「リスク」=危険ではなく、事故の起こる「確率や可能性」または行為による危険や利益を損なう現象と捉えている。

3) 自らの直接体験の影響 (活かされているか)

スタッフでは役に立っていないという回答がなかった。一方、ボランティア・リーダーでは役に立っていないという回答が僅かにあった。

4. まとめ

同じような考え方でも、「スタッフ」は数々の直接体験から「リスク」を事故の起こる「確率や可能性」または行為による危険や利益を損なう現象と捉えていた。一方、経歴の浅いボランティア・リーダーは、「リスク」=危険と捉えていた。両対象とも、自らの直接体験が活かされていた。

引用文献

- 石井至 (2002) 凶解リスクのしくみ, リスク総論, 東洋経済新報社, pp8-15
中西健夫 (2007) 質問紙調査の手順, 株式会社ナカニシヤ出版, pp5-15, pp55-59
小室達章 (2013) リスクマネジメント研究における「リスクの想定」, 日本情報経営学会誌, pp65-67, pp72-74
Nick W. Hurst (花井荘輔訳) (2000) リスクアセスメント, 丸善, p12
甲斐知彦 (2011) リスクマネジメント, 野外教育における安全管理と安全学習-, 野外教育入門シリーズ第2巻, 杏林書院, pp8-18